

意識をつくる

もう6年？

1月で、阪神・淡路大震災から6年になります。当時、被災地を歩いた私にとっても、もう6年という感覚です。しかし、確実に月日が流れています。小学校の高学年の子は、地震のことを覚えているのですが、低学年の子は、わからないんですね。

防災生活圈事業と池袋本町の6年

池袋本町の6年はどうだったでしょうか。

ご存知でしたか？池袋本町の防災まちづくりは、「防災生活圈事業」によって進められています。この事業は、大地震が起きても「逃げないで地域を守ることができるまち」を目標に、幹線道路などに囲まれた地区を単位に、防災組織などまちの防災力を高めながら、道路・公園・広場・緑・街並みなどを改善し安全で住みよい環境づくりを進める事業です。

ふりかえると、平成7年7月に「池袋本町防災まちづくりニュース第1号」を発行してから、今回で第20号になります。池袋本町で防災まちづくりが始まって6年、「防災まちづくりの会」が結成して5年になります。

この6年間、貯水槽の設置・民間井戸の改修・電柱の移設・防災まちづくり祭・小中学校の井戸広場・JR職員住宅跡地買収などは、「防災まちづくりの会」の活動の中から生まれた成果です。このように、まちの中で、少しづつ目に見えるものができてきました。

わが家の防災対策

それでは、「わが家の防災対策の6年は、どうでしょうか？」という質問をされたとき、どのように感じますか？「ああ、なんにもやってない！」、「消火器はあるけど、非常持ち出し袋なんて用意してないなあ。」「水や食料は用意したけど、もう何年もしまいこんだままだなあ。」なんて反省したり、「忙しいから」という言い訳してみたり。ドキッとすることが多いんじゃないですか。どうしてそんな気持ちになっちゃうんでしょう。きっと、心のどこかでやらなければいけないと思っっているんです。でも、やれないんですよね。



防災意識を考えるワンポイント講座

今回は、年々低下しているといわれている「防災意識」に焦点を置いたワンポイント講座です。

防災対策をやる理由や目的に「生命や財産をまもる」なんてよく言われますが、漠然としすぎていますよね。この点を簡単な次の演習を使ってさらに深く考えていきましょう。

【演習】

あなたが「地震の被害からまもりたいもの」をできるだけ多くあげてみて下さい。50を目標に、それより多くてもかまいません。紙に書き出してみましよう。

【ヒント】

- 1 人や物、形のない物など、どんなものでもいいです。
- 2 人の場合、「家族」「友達」とするのではなく、実際のその人のことを思い浮かべながら「氏名」を書いてみましょう。
- 3 地震は、日本中どこでも起きる可能性があることも忘れないでください。
- 4 家族や職場、仲間同士で話し合いながらやってみるといろいろ思いつきますよ。

* * * * *
「まもりたいもの」はいくつあげられましたか。これまでの例では、「家族のことが気になる。」「育った町の思い出が燃えちゃうのはイヤだ。」などの意見がありました。

一生懸命築き上げてきた生活の基盤や財産、またお金では買うことのできない、大切な家族、何でも話し合える友達、最愛の恋人、思い出の品物、生まれ育った街の風景…を一瞬に失ってしまうのが地震の被害なのです。

「まもりたいものを守るために」このことから、もう一度「防災」を見つめ直してください。

(防災ネットワークプラン 井上浩一)

池袋本町

防災まちづくり

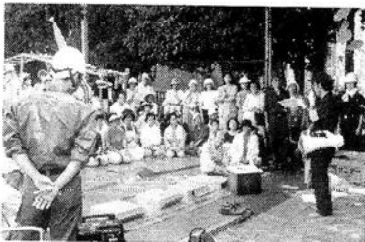
Indukur o Nonoyo
Bosai-Wachizukuri
News
no. 20

2001年1月17日発行

発行：池袋本町防災まちづくりの会
豊島区まちづくり推進課
問い合わせ先：
(財)豊島区街づくり公社
TEL 03-3981-4732
編集協力：(株)防災&都市づくり計画室

昨年よりも実戦的に

池袋本町総合防災訓練



防災意識を高めるために毎年、総合防災訓練が行われています。昨年8月27日には、これまでの防災訓練とは違った、より実戦的な訓練が行われました。それが「災害応急対策型訓練」というものです。

訓練は東京に直下型地震が発生したとの想定で行われました。まず各町会毎に公園や広場に集合し、初期消火や負傷者の応急救護を行い、次に救援センターの3つの小中学校へ負傷者を運んだり避難したりと、実際に災害が発生した時に追られる対応を、順序だてて訓練しました。

町会別の訓練の後、参加者は実際に割り当てられている救援センターに集まり、避難者の受け入れや防災資器材の取扱い、炊きだし等の訓練を行いました。

訓練には3つの学校を合わせて500人以上の方々に参加されました。

●毎年8月に入ると1ヶ月後の防災記念日を思い、昔はこれといった防災設備もなく、人々が力を合わせて被害を最小限に抑えてきたのだと想いを馳せます。そして1月、阪神淡路大震災の教訓から、人々が協力し合い防災意識を高めていくことの大事さを痛切に感じます。本町地区の防災訓練は毎年恒例になっていますが、参加をしてくださる方が同じ顔ぶれなのが残念でなりません。もっと多くの住民に参加していただく方法を模索する必要があります。阪神淡路大震災の時、火災の被害を最小限に食い止めた地区の消火方法は住民のバケツリレーによるものでした。実践的な方法の1つとして競技形式でバケツリレーの訓練も検討していきたいと思います。みんなで力を合わせて安心して暮らせるまちを実現させましょう。(白石信彦/末廣町会防災部長)

●初めて参加しました。実際の「その時」は季節も時間も条件がすべて違いますが、訓練に参加して、見学しているだけでなく自分が主人公になって体験してみることが大切だと思いました。「備えあれば憂いなし」とはまさにこのことですね。「その時」自分を守り、まちを守るために知恵を身につけておくことの大切さを実感しました。こればかりは人任せにできません。ただ残念なことは、1つ1つの訓練や編成を前もって組んでおかないで、その場で対応していくようにすると、もっと実践的になったのではないかと思います。半日という時間では無理なのかもしれませんが……。(投稿)

つれづれに一言

今年もまた、一月十七日がめぐってくる。あの日、あの時、未明の空には真っ赤な月が出ていたと云う。まるで泣いているのごとき赤い月。その光に照らされて、五千名を超える命が天に昇った。その日のうちに映像は日本中、いや世界中に伝えられ、誰もが眼を疑いつつも、明日は我が身と思わなかっただろうか。そして六年、もう六年と思う人もいれば、遠い昔と思う人もいる。何時の間にか、自分には関係のない六年前となっているのではないだろうか。これは自戒を込めての感慨である。しかし、被災地ではまだ時間が止まったままの人々がいる。なくした時間を取り戻せない人々がいる。時間は休むことなく流れ、我々は抗うことなく流れ続けていくが、時には立ち止まり、振り返ることも大切だ。せめて一年に一回でも、あの日、あの時の事に想いをせたい。それが一月十七日。